



仕事の現場から

「心理相談員って知っていますか？」

佐野恵子

私は、市町村の保健センターで行われている一歳半と、三〜三歳半の子どもを対象にした乳幼児健診の心理相談員をしています。子どもの発達の理解と子育て

支援を兼ね備えた役割を担っています。資格の有無はいまのところ問われていません。大学や大学院で心理や発達について学んだ人が就いていますが、大半が非常勤です。

ほとんどの母子は乳幼児健診を受けますが、心理相談を受ける人は少ないと思います。あまり知られていない仕事ですが、発達に困難を抱えそうな子どもに気づき、その子らしい育ちを支えるにはどうしたらいい

かを考える重要な役割を担っていると思います。では、どんな仕事なのかご案内しましょう。

乳幼児健診が開催される日には、その地域に住む対象年齢の子どもと母親（父親や祖父母の場合もあります）が、前もって配布された問診用紙に記入して保健センターに集まります。受付を済ませると、保健師が心身の成長を確認します。次に小児科医・歯科医の診察があり栄養相談や生活相談もあつて、最後に保健師が必要と判断した母子に心理相談を勧めます。

相談室は会場の中で一番静かな場所にあります。健診会場で泣き通しだった子どもと母親にとって、とり

あえずホッとできる場所になっています。しかし、どうしてここに来なければいけないのかと不安な気持ちを抱いて来る人もいます。中にはインターネットで得た情報で、発達障害かもしれないと不安になって来る人もいます。多くは言葉が遅い、かんしゃくが激しい、落ち着きがない、手をつなぎたがらない、吃音、爪かみ、人見知り、育児不安といった相談です。まれに虐待の疑いのある子どもと家族に会うこともあります。

心理相談員は子どもと遊び、母親の話を聞いて発達の課題の有無や程度を判断し母親の悩みを共有し、育児意欲を高めるような助言をします。必要に応じて電話や再来面接の約束をし経過をみます。フォロウ教室を紹介することもあります。

フォロウ教室は保健師・保育士・心理相談員のチームが一クール四〜六回の親子遊びを提供します。子どもは小集団の中で他者とかかわりながら遊びを体験します。母親同士の話し合いの場もあります。この過程で課題を確認し母子関係の改善や強化を図ります。上

記のフォロウを経て、発達の課題の大きな子どもは療育や医療機関を紹介します。そのほかの子どもたちも必要に応じて相談を継続します。このようにして出会ったたくさんの親子の中から、二つの印象に残っている事例をお話ししましょう。

Aは一歳半健診で、意味のある発語も指差しもなく、言葉の理解も対人関係も弱い子どもでした。言葉のかけ方や家での過ごし方などを助言し、再来面接を経て二歳ごろにフォロウ教室にお誘いしました。

そのころには簡単な言葉の理解が増え、なんとなくわかりあえるようになり、母親は喜んでいました。しかし、教室内では、手遊びや体操に参加することはなく、おもしろいものが目に入るとすぐにそちらに体が動いてしまう子どもでした。参加を始めて間もなく母親は妊娠がわかり、さらに切迫早産の可能性のために安静が必要と診断され、途中で教室は終了となりました。

そして、無事出産し、下の子を連れての移動が楽になつてきたころにAと面接しました。幼稚園の年少クラスを希望し、プレ保育に通い始めたところでした。久しぶりに会ったAはやはりマイペースな子でした。

家でもプレ保育でも落ち着きがなく、日々大変という訴えがありました。母子関係の悪化が生じてきており、入園後の集団生活も本人にとって大変だろうと判断し、療育相談室を紹介しました。すると母親は「この子は障害をもった子なんでしょうか……。やはりそうなんですね」と涙されました。私は保健センターでのフォローは限界があることと、療育相談室の役割を説明し、了解してもらいました。しかし、その時の母親の悲しみに満ちた重い表情が忘れられませんでした。

一年後、下の子の一歳半健診の会場で母親から声をかけられました。とても明るく元気な声で「おかげさまで、四月から介助員付きで幼稚園の年中クラスに入園することになりました」と報告してくれました。この一年間、幼稚園ではなく療育相談室でのグループを

利用し母子共にたくましくなっていました。このように、動揺しながらも障害を受容し前向きに生きていく母子に、私はたくさん出会ってきました。

Bがフォロークラスにやってきたのは二歳を過ぎたころでした。言葉理解に大きな遅れはないものの、マイペースでつかみどころのない子どもでした。母親からは、ご近所とのトラブルについての話が多くて、母親との間でBの理解が深まりませんでした。

その後、三歳児健診で発達の再確認をすることになりました。当日、Bはおもちゃ遊びに集中していたので、私は母親と話をすることにしました。少しすると、Bは同じフロアで遊んでいたCにおもちゃを取られてしまったようです。私はその状況を確認しないまま同じおもちゃを見つけてBに渡しました。Bは無言で受け取って同じように遊び続けました。その時、母親が「あの子は怒っています」と独り言のように言いました。すると、間もなくCがBの邪魔をしそうになっ

たので、私はBに「こつちでも遊べるよ」とCとは別方向の遊びの場を示しました。Bはその方向に移りながら遊びを続けました。トラブルにもならず平穩に時間が過ぎ、私はようやくBとかかわりがもてたとさえ思っていました。すると、再度母親が「あの子は怒っています」と静かな口調で言いました。私が「そのように見えませんが……」と言った途端、母親はCの所に行行って「だめでしょ」としかり、「こんな不公平な人は相談できない」と言って帰ろうとしました。私はその時、Bが落ち着いていたので終了にしても大丈夫だと思いい「相談はおしまいにしましょうか」ととっさに言ってしまうました。すると、母親は「相談したいことがあるから来ているのに、別の人に代わってもらいます」と言って帰ってしまいました。

その後が大変でした。母親は苦情の電話をセンターにかけてきて、私が以前から話を聞いてくれない人であると訴えました。私は相談終了を告げてしまったこととは反省したものの、それ以外の非はなかったと思っ

ていました。しかし後になって、あの場面で怒っていたのはBではなく母親自身だったかもしれないことに気づいたのでした。それは、Cに対して注意しようとしてない私に対する不満であったのかもしれないし、またほかの理由があったのかもしれないが推測はしてみるものの本当のことはわかりません。ただ、母親自身の表現の仕方やBとの関係のもち方に早くから気づいていれば、母親に嫌な思いをさせず、もう少し母親に添った対応ができたのかもしれないと反省させられました。わからないことがありながら母子に寄り添うことの難しさを教えられました。

以上の二つの例を通して私の心理相談員としての仕事の一端を紹介しました。今後も発達や地域支援に関する最新の情報を得ながら、幼い子どもと母親や家族から多くを学び、より良い支援ができますように努力して参りたいと思っています。

(心理相談員)